

## 第34回 歴史リレー講座「春日の歴史と宝物—それに私の祖先と大和—」 花山院 弘匡氏 (H29.7.16)

人間は自然の恵みの中で生かされ命が繋がり、その命を守って下さっているのが神様であります。この考えが神道の本質です。その昔、春日大社の東に位置する御蓋山みかさやまは神様の依り代として平城京を守護しました。また、命懸けで旅立つ遣唐使の無事が祈願された場所です。阿倍仲麻呂が遠く唐の空のもとで故郷を懷かしんだ歌「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも」に詠まれたことで知られます。

御蓋山・春日山は神様の山として、また、豊かな水源地としても都を支えました。現代でも先進国で30万人の街に原生林が残る土地はここ以外にありません。さらには春日大社は768年、称徳天皇の命により御本殿が建てられる以前から祭のために神酒を造る建物がありました。『続日本紀』には750年に天皇が祭の日に春日の酒殿さかどの(醸造所)を訪れた記録があります。ちなみに天皇が遣した勅使が詔かことのりを奏上する祭を勅祭といい、とりわけ春日祭、葵祭、石清水祭は三大勅祭と呼ばれます。

春日大社は御蓋山の尾根づたいに建てられました。神様の山を削らないことを最優先したため、御本殿や回廊は山の稜線に合わせて造られ、極めて複雑な構造となっています。このような高度な南都社寺の技術は後世の城造りにも応用されます。日本初の天守閣を備えた城は奈良に松永弾正が築城した多聞城で、全国から見物人が押し寄せたといいます。ルイス・デ・アルメイダというポルトガル人は、「世界中を探してもこれほど美しい城はない」と絶賛。また、多聞城の秀麗さに感動した織田信長はのちに安土城を手掛けました。日本中の天守閣の始まりは奈良なのです。

かきんのいん ここからは花山院家のお話を。祖先は大化の革新(645年)の立役者、中臣(藤原)鎌足です。藤原道長の曾孫の次男が私の家系で、私は花山院家33代目になります。現代ではあまり評判の芳しくない道長ですが、実際は文武ともに才能豊かな人で、源氏物語のモデルとも言われます。家名は花山上皇の屋敷を頂いたことによります。父も私も長い教師生活を経て春日大社の宮司職に就きました。しかしながら、伊勢神宮や春日大社は世襲ではありません。

ご存じの通り、豪族が支配する国から天皇中心の国家への改革に奔走したのが鎌足と中大兄皇子。彼らが密談した場所が談山神社たんざん(桜井市)です。中国に巨大な統一国家が誕生したにも関わらず、日本では天皇はおられるものの豪族ごとに支配し、バラバラであり、このままでは太刀打ちできず呑み込まれるとの危機から改革を目指しました。さらに白村江の戦いの敗退により、さらなる危機の高まりが中央集権を加速させました。鎌足の息子である不比等も頭脳明晰な人で持統天皇の子、草壁皇子の教育係に抜擢されています。実質的に平城京を造り、大宝律令による法治国家体制、官僚制度、貨幣経済体制、外交体制を全て整え、文化力で中国に対抗しようとしました。いわば現代にも通じる国際スタンダード国家の礎を築いたのです。

鎌倉時代に入ると藤原氏の長者は近衛、九条、一条、二条、鷹司という姓を名乗るようになります。花山院はこれら五摂家の次の大臣家です。花山院家は南朝を作った後醍醐天皇の母親筋にあたります。花山院師賢は後醍醐天皇の従弟で側近を務め、元弘の乱で天皇の影武者として比叡山に上がるも途中で正体が発覚して失敗し、後醍醐天皇は隠岐へ流され、師賢は千葉へ流されて亡くなり、現在は小御門神社ちうみかどとなっております。

春日大社に話を戻しましょう。戦国武将も神様を畏れ、当社はただの一度も戦乱による火災の憂き目に遭っていません。軍事上のこともあります。東大寺は平安時代終わりの平重衡、それと弾正が戦った際を含め2度の焼失を経験。興福寺も火災による再建を繰り返しています。京都に至っては応仁の乱で全てのものが焼き尽くされました。春日大社には宮中の人々が神様へ奉納された平安時代以降の宝物が奇跡的にもすべて残っています。しかも、神様の御神宝なので人間の手が触れる頻度は虫干しを除いて20年に一度程度でした。これが春日の宝物が「平安の正倉院」と称賛される所以です。

このように、日本の始まりの地は奈良であり、歴史の本質はここ奈良に現代も脈々と息づいています。さらに言えば歴史の深さにおいて京都など奈良の足下にも及ばないということです。灯台下暗しといいましょうか、この誇るべき事実を奈良の人は意外と、あまり深くは認識していないのです。













